

平成23年度 「ベトナム仮設機材事情視察団」報告書

期 間：平成23年12月6日(火)～12月9日(金)

訪 問 国：ベトナム社会主義共和国 (Socialist Republic of Viet Nam)

訪 問 地：ホーチミン市 (Ho Chi Minh City) 旧サイゴン市

参 加 数：29名(仮設工業会1名、添乗員1名を含む。)

1. 視察の概要

ベトナム社会主義共和国のホーチミン市で開催された第5回建設・建築機材等に関する国際見本市 (ConBuild 2011 Vietnam) 及びベトナムにおける仮設機材製造メーカー大手3社の一つである SAKI Corporation の本社事務所、ホーチミン市内の同社製造工場及び SAKI社製造の仮設機材 (枠組み足場、パイプサポート) を使用しているビル建設現場を視察し、ベトナムでの仮設機材に関する種々の情報把握のため、本視察団が派遣された。

視察団総勢29名は12月6日(火)に東京国際空港からベトナムに向け出国し、ほぼ当初の予定どおりにスケジュールを消化し、12月9日(金)に無事日本に帰国した。



ConBuild 2011 Vietnam 会場

写真1

2. 視察場所と視察内容

1) 第5回建設・建築機材等に関する国際見本市 (ConBuild 2011 Vietnam)

平成23年12月7日(水)～12月10日(土)までの4日間の会期で、ConBuild 2011 Vietnam (建

設・建築機材等に関する国際見本市)がホーチミン市のサイゴン見本展示会場で開催され、初日に同会場の視察を行った。

この見本市は、2007年から毎年ベトナム国内で開催されており、建設、建築、鉱業の産業分野で使用される機械、工具、材料、作業車両、種々の技術やサービスに関する国際貿易見本市である。今回で5回目の開催であり、来年はハノイで開催される予定である(写真1)。

サイゴン貿易見本市(SECC)は近代的な施設であり、室内展示場面積は180,000m²、屋外展示場面積は360,000m²とのことであった。出品展示されていたのは、インフラ整備のための建設、建築、鉱業の産業分野で使用される建設機械、建設車両、掘削機等が中心であり、160社ほどのメーカーが展示ブース(展示コーナー)を設けていた。しかし、展示会の規模は小さく、昨年の視察団が訪問した上海での Bauma China 2010と比較すると5分の1程度であった。

仮設機材関係の展示ブースはわずか3カ所で、仮設機材の展示は中国及び台湾の2社の出品であり、もう1社はコンクリート打設時に使用する部材等の展示であった。

2)SAKI Corporation への訪問

12月8日(木)はベトナムで一番大きな仮設機材製造メーカーである SAKI Corporation を訪問した。最初にサイゴン市Thu Duc区にある本社事務所を訪問した。Dan会長自らの出迎えを受けて簡単な会社説明を受けた後、バスで事務所から20分程の場所にある自社工場に案内していただき、工場の内部を見学させて頂いた。工場ではコイル状鋼板から鋼管を製造するライン、電気溶接の作業場、クランプ部品を作るプレス作業場や鋼製型枠の作業場を視察した。

お昼には、豪華な昼食をご馳走していただき、暖かい対応に団員一同感激しました。昼食を摂りながら、Dan会長及び幹部との挨拶の交換を行った。また、今回の工場視察に際して、色々とお世話いただいたお礼に日本から持参したお土産(打掛{着物})を贈呈したところ非常に感激されていた。

会食しながら、ベトナムの建設業界の現状や SAKI社の概要を説明いただいた。現在のベトナムの急務の問題はインフラの整備であり、建設関係の国家予算は約2,000億円であり、また、海外からの政府開発援助(ODA)は日本が一番多く、インフラ整備に大変役立っており感謝しているとのことであった。

仮設機材製造メーカーはベトナム全体で20社程あり、大手は3社で SAKI社は最大手とのことであった。SAKI社は、ホーチミン市(社員80名)とハノイ市(社員170名)に工場があり、今年度の年商額は推定1,700万米ドル(約12億円)、同社社員の平均月給は約270米ドル(約2万円)であり、製品は国内はもとよりカンボジアやラオスなどに



ショッピングセンター建設現場

写真2

輸出しているとのことであった。
今後、SAKI社としては日本との積極的な交流を希望しているとの話であった。

午後は、SAKI社の仮設機材を使用しているビル建設現場を2カ所視察させていただいた。最初の視察現場はショッピングセンター建設現場であり(写真2)。もう1カ所の現場はマンション建設現場(写真3)である。写真2の黄色に塗装されたものがSAKI社の製品であり、写真3のメッキした仮設機材はすべて同社製とのことである。



マンション建設現場

写真3

いずれもベトナムの大手建設会社が施工している現場であり、両現場では鋼管製の仮設機材(枠組み足場、パイプサポート等)が使用されていた。しかし、少なくとも現場においては、地震や風による水平荷重に対する配慮はされておらず、写真2、3でもわかるように、布わくや床付き布わくはほとんど取付けていない状況であった。

3. まとめ

1862年にフランス領となって、ほぼ1世紀にわたり植民地としてフランスの支配を受け、その後1960年から約15年間にわたるベトナム戦争の苦難を乗り越えて、ようやく平和を取り戻したベトナム社会主義共和国である。しかし、実際にベトナムを訪問し、経済・産業技術・生活水準等をみると、まだまだ発展途上の国であることは否めない事実である。国民の平均年齢も29歳(聞き間違えかもしれない。)と若く、鉱山資源や農産物も豊富であり、これから大きく進展する可能性を秘めた国である。

道路を横断するのも一苦労なほど街はオートバイで溢れており、非常に活気のある若い国であると実感した。これからのベトナムの発展のためには、ODAによるインフラ整備の援助はもとより、民間レベルでも積極的な技術協力・技術移転・技術教育等が必要であり、今後、日本の果たすべき役割も大きいと思われる。

最後に、今回のベトナム視察に参加いただいた参加者の皆様並びに旅行会社添乗員(森氏)、現地での通訳の方々に改めてお礼申し上げます。